

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021@リモート」を開催しました！

人間科学研究科 村本邦子

最終年となる今年も、コロナ禍のため現地開催を見送り、リモートでのプロジェクトとなりました。8月6日(金)からむつ市立図書館で開催していた家族漫画展も、29日(日)までの予定だったところが、コロナ禍で公共施設閉鎖したことにより、25日(水)までとなりました。

8月27日14時30分～16時は、ZOOMで、支援者支援セミナーを振り返る座談会「家族の笑顔を支えるむつの力～東日本家族応援プロジェクトの十年を紡ぐ」を開催しました。院生たちが頑張ってくれ、何度も集まって事前準備しながら、タイトルや進行を考え、座談会部分の司会もしてくれました。座談会には、むつ市児童相談所から眞手課長と桜庭さん、そして今はOGとなりますが、初年度からずっとプロジェクトを支えてくれた杉浦さんが、立命館からは中村先生と私が参加し、これまでの成果を振り返り、今後の可能性に向けて議論をしました。

杉浦さんがプロジェクトの始まりから、経過までをパワーポイントにまとめてくれ、コンパクトに十年を振り返ることができました。最初は、児童相談所と立命館の企画だったものを、地域の力を引き出すためのプロジェクトだからと、各機関に連携を呼びかけ、2年目からは実行委員会を設けて続けてきたご苦労とともに、毎回、プロジェクトの確かな手ごたえがあり、それぞれの機関が、このプロジェクトを自分の事業であると位置づけて現在に至ることを語ってくれました。

むつで生まれ育ったという眞手課長は、私たちがむつに興味を持つことが嬉しかったということと同時に、家族のことに興味を持って家族のことを考えること自体が支援なのだと繰り返し言うておられました。支援者の思いを先行させるのではなく、あくまでも家族主体の支援ができるよう研修を続けていきたいとのことで、若手の桜庭さんも、セミナーがそんなトレーニングの場になるのではないかと言うておられました。

むつ市連合PTA、図書館、公民館、むつ市子育て支援課などからもメッセージがあり、プロジェクト終了後の新たな展開に期待が寄せられました。後半では、今後の課題や可能性についても議論し、このプロジェクトはこれからも育っていくに違いないという確かな手ごたえを残しました。これからどんなふうになっていくのを楽しみにするとともに、地域が地域の力に気づき、パワーアップしていくプロセスに学び、こういった動きがあちこちに広がっていくことを願います。

お父さん応援セミナー、漫画トークは一般公開の形で行われたため、常連だけでなく初めての参加者などもいて、新たな広がりも感じさせてくれました。院生たちには是非、下北やむつを体験して欲しく、十月のフィールドワークが実施可能となることを願っています。

プロジェクト最終年の取り組み

人間科学研究科 中村正

私は、支援者支援セミナー座談会に出席し、「お父さん応援セミナー」の講師を務めました。ここでは後者のことを書いておきます。

「お父さん応援セミナー」は「子育てを楽しむために一家族の中のお父さんの在り方・地域に貢献する男性像」と題したオンライン講演会でした。34名の参加がありました。いつも現地で開催しているようにプロジェクト初日の夜間です（8月27日（金）の午後6時30分から8時まででした）。例年は公民館で男性だけのグループワーク風にしているのですが、オンラインとなり、最終年度でもあったのでオープン参加としました。むつ市以外からも参加してくださいました。

「お父さん応援セミナー」はむつのプロジェクトだけです。これは支援者支援セミナーがあることと関係しています。父親に何ができるかを問いかけたかったのです。虐待にもつながる子育ての悩みの大きな課題は母親の孤立する育児です。ワンオペ育児とも言われるほどです。男性の育休の取得率6%程でしかありません。事例検討中心の支援者支援セミナーからはみ出す独自の課題を扱いたく、お父さんにできることを考えるために独立させたのです。

お父さんの役割は子育てそのものを担う養育者たる親としての課題、妻との関係をよくするパートナーシップ、つまり夫としての課題があります。縦の関係と横の関係が交差するところに課題が多く詰まっていることを照らしだすこととしました。この10年（11年）かけて取り組んできたのは「父親年齢の積み重ねで育つ父性」ということです。そのために、1) パートナーシップ（タテのなかのヨコ）、2) 子どもは夫婦関係をみて男女関係の在り方を学ぶこと（関係性の再生産）、3) 男性性ジェンダーのゆくえの理解が大切なことをグループワークで実感してもらいながらセミナーを実施してきました。公民館の講堂でわいわいがやがやと実習をしながらレクチャーを混ぜたものでした。

例年行っていた実習は「男性のコミュニケーション力」です。下表に示したようなことを男性同士で実施してきました。今回の最終オンラインレクチャーではこの背景と経過、私の取り組む「男親塾」（大阪で取り組む虐待する父親向けのプログラム）のこと、そして私自身の家族と育児体験について話をしながらまとめとしました。男親塾での対話から三つの事例を紹介し、むつで取り組んできたコミュニケーションワークが奏功して男親力が発揮できていることを話しました。

支援者支援セミナーの事例の考察は家族をシステム（関係性の束）としてみることに力点を置いています。「お父さん応援セミナー」ではそれを受け、息子、夫、父親の存在と役割に光をあてています。家族のなかの男性問題という視点です。男性たちが古い男らしき規範に囚われないことが家族全体の生き心地の良さと幸福をもたらします。こうした男性のためのコミュニケーションワークは私が世界のあちこちを周りながら学んできた男性問題に

取り組む国際ネットワークのなかでも試みられているものです。世界とむつの男たちをつないできたプロジェクトでした。

その最後は、「10（11）年もの長い間、むつでセミナーを受け入れてくださりありがとうございました。お父さんがセミナーに参加している間、子どもとお母さんが調理室でパンを焼いていた時がありました。終わったら家族みんなで家路につく情景が忘れられません。セミナーが終わるとお父さんたちが心地よい疲労感や満足感を得ている様子が表情からわかりました。毎年、気持ちよく実施することができました。また、どこかでお会いするかも知れません。コロナ禍を乗り越えていきましょう。」と締めくくりました。

○お父さん応援セミナーで取り組んできたコミュニケーションワーク事例

男性のコミュニケーション力

- ① レポート・トークとラポート・トーク
- ② 「I」メッセージと「You」メッセージ
- ③ 後出し負けじゃんけん（勝つことに慣れている）
- ④ 沈黙とおしゃべりの肩もみ練習
- ⑤ 自分の親父の思い出トーク（同じことして？）
- ⑥ コミュニケーションワーク（聞いている？他己紹介）
- ⑦ 男はつらいよ体験トーク（弱い部分もある）
- ⑧ 自分のために花を買ったことありますか？
- ⑨ 男性の友人は？何を話す？……

2021 年 むつ市 東日本・家族応援プロジェクト

客員教授 団士郎

十年の事業の一区切りとなることを様々考えながら、今年のズーム開催に臨んだ。「漫画トーク」をひとつの場所で十年間繰り返すのはこれまでしたことがなかったし、その蓄積がどんなものをもたらすかは大いに関心のあることだった。無論、それほどの事が起きるわけでも、起こせるわけでもないことは承知した上でのことだ。家族マンガ展も連動しているので、そちらについては準備し続けてくれた図書館スタッフの人たちや、利用者がどのように受け止めたかとも深く関連していることになる。

人口五万人余りの地方都市で、図書館の利用者はどれくらいで、そこで毎年開催されるマンガ展がどんな力を持ちうるのかは興味深い。図書館がベストセラー本を一番いい本だ

とは言わないように、来場者数にマンガ展の意義をゆだねなければならないことはない。そういうスタンスで十年続けることができたのはとても大きい。

さらに、これからもマンガ展継続開催が可能であるとしたら、これはかなり稀なことだ。一人の作家の作品展を定期的に十年単位で繰り返すなどという事は、なかなかあるものではない。想像はできても、実際にそのようなことが行われて、これからも継続するとしたら、本当に稀だと言う事はわかると思う。

それを実現したのが、むつ市立図書館と「木陰の物語」との出会いだったということだ。単行本「家族の練習問題」は十数年でシリーズ 8 巻目を迎えている。これも大きな出版社で、マスセールスを考えていたら難しいことだったと思う。実際、私の新書（「不登校の解法」文春新書）は七刷まで重ねていたが、絶版になった。持続・継続するには、サイズ(数と量)の問題が大きいのだということがわかる。

私達の社会は今、地域と言うことを盛んに口にするが、一方でグローバル化をまっしぐらである。爆発的なセールスを実現できないものや、売れ行きに陰りが見えたモノはどんどん廃棄されていく。そんな中でロングセラーになっているものの多くが、ローカルサイズである。それは持続・継続の大きな要因になっていると言える。

今、社会では持続可能な次世代へ向けた取り組みが叫ばれている。その要因のひとつがサイズであり、それに合った規模が地方なのだというのは、この十年の体感的知見と言っているだろう。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021」に参加して

臨床心理学領域 M1 原口泰知

昨年に引き続きオンラインでの開催となったプロジェクト最終年度への参加にあたっては、「災禍における制約と変化する状況の中で、できる限りのことをする」という心構えが求められた。東日本家族応援プロジェクトは、毎年、8月の青森県むつ市を皮切りに、12月の福島県福島市へと南下しながら東北各地を巡っていく。先の見えない状況下でも、創意工夫を重ねて走り切り、次の地へとバトンを繋ぐこと。これこそが、この10年間続けられてきたプロジェクト全体の中で「本州のてっぺん下北半島」が果たしてきた役割なのかもしれない。その役割を全うすることが、私にとっての「できる限りのこと」だと思った。

以下では、今年度行われた3つのオンライン企画のうち、院生として企画・運営に関与した『支援者支援セミナー座談会』での学びに焦点を当てる。例年むつで行われていた多職種による事例検討の場、『支援者支援セミナー』の成果を振り返り、今後に向けた展望を話し

合うというのが企画の主旨であった。私は司会者としてその場に参加させていただいた。

活発に繰り広げられた議論の中でも、特に登壇者の一人である児相職員の方が繰り返し強調されていた「関係者主体から家族主体へ」というキーワードが印象深い。このことば自体が持つ含蓄もさることながら、それが今まさにむつの対人援助の現場で活躍されている方の口から何度も、力強く発せられることに圧倒される思いだった。

関係者＝専門家による専門性の行使よりも先に、支援対象となる家族そのものに興味を持ち、理解していくこと。地域の力を引き出し、地域全体で家族を支えていくこと。立命館とむつの二人三脚によって蓄積されてきたこの10年間の経験が、日々の実践を支える確かな「理論」として結実する瞬間に、私自身も立ち会わせてもらったような気がした。

そこには「つづけること」の力があつたことに触れないわけにはいかない。「3.11」という決定的な時代の転換点を契機としたプロジェクトの出発から、そこでの取り組みが現地で確かに広がり、根付いていくまでのダイナミックな展開が、登壇者の語りの随所に現れていた。ある特定の課題解決を目的とした支援とは異なる、「つづけることをつづけていく」という実践の枠組みそれ自体から学ぶべきことは多い。だがそれ以上に、震災後の不確実な状況下において、「10年続ける」という宣言がなされたこと、そして今、「10年続けてきた」という経験を共有し合えること、加えて、わずかながらではあるが、私自身にもまたその歴史のひとときを見届けることが許されたという事実への驚きは、筆舌に尽くしがたい。

このようにして、遠く離れた下北・むつに生きる人々とのご縁をいただいたことに感謝したい。プロジェクトとしての「次年度」は存在しないが、代わりにここで得た学びを今後も繰り返し言葉にしていくことで、紡がれてきた歴史を引き継いでいこうと思う。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021」に参加して

臨床心理学領域 M1 渡邊友

プロジェクト最終年度であるが、むつ市では9月まではコロナの予防接種のため全てのイベントを中止し、市の職員の方もコロナ対策に専念することとなったため、本プロジェクトもオンラインでの実施となった。（漫画展は現地で開催することができた）私は、支援者支援セミナーの振り返りを行う座談会、お父さん応援セミナー、漫画トークに参加した。支援者支援セミナーの座談会は、院生がファシリテーターを務めることになり、タイムスケジュールや座談会タイトル決めなどの打ち合わせに参加しながら、企画を作り上げるプロセスに参加することが出来た。現地の方との交流が無い中で、院生として初めてプロジェクトに参加し、最終年度としてこれまでの振り返りとこれからについての座談会の企画を練る

のは、ホームページや先生方との打ち合わせという限られた情報を基に想像力を駆使して考える作業であり、初めての経験だった。一次情報（現地に行って見て考えること）の大切さを感じながらも、プロジェクトの締めくくりとして、むつの関係者の方、立命館の先生方、参加者にとって良かったと思えるような座談会を目指した。少ない情報に何度も目を通す中で、きらりと光るプロジェクトの本質が浮かび上がってくるのを感じていた。私が読み取ったプロジェクトの本質は、地域の問題解決力をいかにして高めるかに焦点を当てている、問題点ばかりに目が行くアプローチではなく強みに焦点を当てること、地域本来が持つ力を発揮できるように支援することで支援者自身も力づけられる場とすること、システムで地域と家族を捉えること、よくある事例検討会の弊害（担当者が緊張して実りが少ない会になりがち）を踏まえて楽しく参加できる会にすること、皆で知恵を出し合い、別のストーリーや見えないストーリーを探索することである。もっと包括的に言うと、座談会のタイトルとして掲げた「家族の笑顔を支えるむつの力」をいかに抽出し、認め合い、伸ばしていけるか、ということに主眼が置かれていたように思う。そしてこの本質は、支援者支援セミナーだけでなく、お父さん応援セミナー、漫画トークの根底に流れる価値観でもあることが、オンラインで中村先生と団先生のセミナーを受ける中で自分の中で明らかになった。

座談会のディスカッション2部のファシリテーターを務めることになっていたのに緊張しながら Zoom 座談会に参加したが、むつの杉浦さん、真手さん、桜庭さんのコメントから、現地で苦労もありながら大切にこのプロジェクトを育ててこられたということが感じられた。プロジェクトを作り、育てる過程で、人と人が繋がり、支え合う温かい気持ちが交差して、むつと立命館の関係者を相互にエンパワーし、そういう温かい輪がプロジェクトを中心に広がっていったのではないかと感じた。一つの家族を取り巻く問題は、地域と繋がっており、支援者だけでなく、地域で家族の笑顔を支えることで、地域と家族のよりよい未来を作ることができるのではないか。家族と地域の温かな結びつき、支え合いを育てることによって、家族や地域に起きた危機や災難を乗り越える柔軟性や底力が生まれてくるように思う。災害大国日本で求められる、新しい地域と家族の形を、むつのプロジェクトは探索し、育ててきた11年だったように感じた。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021」に参加して

臨床心理学領域 M1 回生 大谷 通高

東日本家族応援プロジェクトは、今年度で10年目となり最終年度となっている。今年は昨年と同じくコロナ禍による影響のため、むつに直接赴いてではなく、リモートでシンポジウムと二つのセミナーが8月27・28日の二日にわたって開催された。

シンポジウムでは、先生方とむつの児童相談所のかたたちとで、10年にわたるプロジェ

クトの活動を座談会形式で話し合うことから始まった。プロジェクトの初期のころ、杉浦さんが中心になって、むつの支援機関や支援者同士のつながりをつくり、それが10年続いたことで、いまではこのプロジェクトのシンポジウムやセミナーが、むつの支援者さんたち同士でかわり、支援について考える機会となっていることを知った。シンポジウムの後半では今後のプロジェクトの方向性について話し合われ、児童相談所を中心にして、むつの家族を地域で支える取り組みが提案された。こうした新たな取り組みが構想されるにいたるに、10年の継続した関係があることを実感できた。

その後、中村先生の「お父さん応援セミナー」が開催された。中村先生の個人的な体験談から男性ジェンダーをはじめとするジェンダー規範の問題性について話された。ジェンダーは一般的に文化的・社会的性差と言われるものであるが、これは日常の経験にふかく染みついたものでもあり、意識的にその問題性を語ることが難しいものとしてある。中村先生のセミナーでは、中村先生の個人体験だけでなく、いろんな事例を提示して、いろんな社会問題にジェンダーが大きく影響していることを解説してくれた。家父長制的価値観が強く反映された地域の家庭において、こうしたジェンダーに関するセミナーは、普段の自身の日常のふるまいを捉えなおす大きな機会としてあることを実感した。

団先生の漫画展セミナーでは、先生が精神病の子どもと一緒に暮らす家族について、漫画では描いていないことや後日談も含めて、家族の変容について話をしてくださった。家族の一人の変化がきっかけで、少しずつ他の家族のメンバーにも変化が生じ、それが織り重なることで、最初の地点とはだいぶ大きく異なっていく様子を丁寧に話して下さった。「精神疾患」「心理療法」「エビデンスデータベースアプローチ」といった専門領域の言葉では触れることや捉えることができない、実際的な家族の歩みを感じさせるお話で、専門家が何を大切にする必要があるのかを感じさせる内容だった。またこのセミナーでは、途中でグループワークが実施され、むつの支援者のかたたちと少しだけ、対人援助について話し合う機会があった。今回、まだむつに直接行けていないこともあって、むつの人たちと関わる貴重な機会になった。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021」に参加して

対人援助学領域 M2 武政詩帆

今回、「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」に参加するにあたって、むつ市の被災状況や過去10年のむつプロジェクトのあゆみ、むつ市における関心事項等について事前に調査し、発表した。私は、むつプロジェクトメンバーのむつ市における関心事項について担当し、霊場恐山と東日本大震災被災者の繋がりや、下北半島における軍事施設について調べた。また、同じむつグループの発表者から、死者こそ他県と比べて少なかったもの

の東日本大震災で受けた甚大な被害や、福島第一原発の事故で再燃した下北半島の原発と核燃料サイクル問題についてなど、事前学習によってむつ市についてより深い知識を得ることが出来た。

本来ならば、7月の事前研究会の翌月に現地へ赴き、フィールドワークを行う予定であったが、コロナウイルスの感染拡大の影響により、フィールドワークは10月に延期となった。支援者支援セミナー座談会、お父さん応援セミナー、団先生の漫画セミナーは元々リモートでの開催予定ではあったものの、現地に行くことのないままオンラインでセミナーに参加をすることとなってしまったのは非常に残念だった。

しかし、zoomでの支援者支援セミナー座談会は、初期からこのプロジェクトに携わって下さっている杉浦さんやむつ児相の方々、村本先生・中村先生の10年分の思いが詰まった、とても充実した座談会となった。今まで支援者支援セミナーを10年やってきたことによる成果や、今後支援者支援セミナーをむつの方々のみでどう運営してしていくか等を話し合い、あっという間の90分間だった。座談会で、むつ児相の方が「家族目線で何がどういった支援ができるのか」としきりに仰っていたことが強く印象に残っている。また、「立命館とむつ児相だけではなく、地域を巻き込んでこのプロジェクトを進めるのものすごく馬力が必要だった。それを10年やってきた結果が、ここにあるんだなと思っている」「(その結果として)むつ市は我が物としてこの支援者支援セミナーを喜んでくれ、市が事業を続けていきたいと言っている」という杉浦さんの言葉から、杉浦さんのこのプロジェクトに対する大変なご尽力とむつの土地の力、地域の強みを実感した。最終年度に少しばかりお手伝いをさせて頂いた身ではあるが、この支援者支援セミナーというプロジェクトに参加することができて、本当に嬉しく思った。

オンライン開催で良かった点として、女性は普段参加出来ない「お父さん応援セミナー」に女性である自分も参加できたことがある。普段は輪になってお互いの肩を揉むところからお父さんセミナーは始まるなど、お父さんセミナーに参加するお父さん同士の微笑ましい雰囲気的一端を知ることができ、オンラインならではの利点を感じることが出来た。

とても充実したむつのオンラインプロジェクトであったが、現地で8月に開催されていた漫画展の会場に足を運べなかったことが大変心残りである。コロナの状況によってフィールドワークに行けるかどうかまだ定かではないが、10月には、むつ市へ行って現地の空気をじかに感じられることを願っている。

